九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 大元の記憶

森川, 哲雄
九州大学大学院比較社会文化研究院

https://doi.org/10.15017/9498

出版情報：比較社会文化. 14, pp.65-81, 2008-03-20. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化』第14巻（2008）65～81頁
*Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University*
vol.14（2008）, pp.65～81

# 大元の記憶

森川哲雄
Tetuo MORIKAWA

## ABSTRACT

In this paper,it is argued a problem how was memorized the name of the Dai Yuan ulus(The Great Yuan dynasty)and its activity by Mongolians of later ages.The Yuan dynasty was founded by Khubilai khan and so it was also called the Khubilai dynasty.However rule of Mongolia by descendants of Khubilai stopped once in the end of the 14th century.It is known that descendants of Arigbukha and Ogedei ruled over Mongolia for a while afterwards.Nevertheless the Mongolians of those days had the recognition that the Yuan dynasty still continued.Dayan khan who succeeded the khan throne at the end of the 15th century called himself the Great khan of the Ta Yuan(the Great Yuan)for the Ming government.But there is no description on the foundation of the Yuan dynasty by Khubilai in the Mongol chronicles edited in the 17th century.One of the editors of chronicle interprets a meaning of Dayan of Dayan khan as "whole" not "the Great Yuan".This means that memory of the Yuan dynasty faded among the Mongolian intellectuals of the 17th century.However editors of chronicle described in the 18th century write down clearly that the founder of the Yuan dynasty is Khubilai ad Dayan means the Great Yuan dynasty.The reason of why they became to understand Chinese and edited chronicles using Chinese materials,especially *the History of the Yuan dynasty.*

キーワード：大元，ダヤン・ハーン，リグダン・ハーン，モンゴル年代記，dayiming

## 1、はじめに

いわゆる「元朝（大元）」はモンゴル帝国の一部であるが，フビライによって創建された国家で，モンゴリア，中国本土，新疆の一部を含む広大な領域に及ぶ．その後継者はすべてフビライの子孫であり，その意味でフビライ王朝とも言われる．しかし元朝は成宗テムル（在位1294-1307）のあと政権内の争いが絶えず，皇帝（ハーン）がその政争に巻き込まれて命を落とす例も多く見られた．1368年，順帝は明軍に追われて都の大都を放棄し，古北口からモンゴリアに逃れ，内モンゴルの応昌に本拠地を移した．彼は中国領の再支配を目指したが，その2年後の1370年，同地で亡くなっている．『元史』巻107，宗室世系表や明側の伝えるところに依る限り，フビライの後裔はその後順帝の子アーユル・シュリーダラ（ビリクトゥ・ハーン，在位1370-1378），その弟[1]トクス・テムル（ウスハル・ハーン，在位1378-1388）の2代までは継続していることが確認できる．トクス・テムルには天保奴，地保奴の二子がいたが，彼らはハーンに即位することも，後継者も無く死亡している．そしてその後のモンゴリアの政治的混乱の中でしばらくアリクブハやオゲデイの後裔など，フビライの後裔以外の者が支配したことが通説になっている[2]．

「元朝（大元）」がフビライ王朝であるとすれば「元朝」はこれで終焉を迎えたことになるが，その後もモンゴル人たちは「元朝」は継続していると主張し続けた．この元朝は1634年にチャハルのエジェイ・ホンゴルが後金国（清朝）の太宗ホンタイジに降伏することにより名実ともに消滅した．

しかしながら長い政治的混乱の中で，書かれた記録がほとんど残らなかったせいか，この「元朝（大元）」時代に起きた様々な事件について，モンゴル人の間にほとんど伝わらず，さらに時代が経過すると「大元」の名そのものの記憶も曖昧になっている．モンゴル人が自らモンゴルの歴史を記すようになったのは，初期の『元朝秘史』を除くと

17世紀になってからである．しかしながら17世紀に編纂されたモンゴル年代記には意外なほど「大元」に関する記述が少ない．ハーン（皇帝）の生卒年，在位年は記すものの，その治績についてはほとんど記していない．しかもフビライと「元朝（大元）」との関係を記している年代記は皆無である．これに対し18世紀に編纂された年代記の記述はかなり異なり，「元朝（大元）」がフビライによって創建されたことだけでなく，一部の年代記には元朝の歴史も記されるようになる．このことはモンゴル人の間にかつて彼らの祖先が建てた元朝がこの時期になって再認識されたことを意味する．そこで本稿では「大元」の存在がモンゴル人の間にどのように伝えられていったのかについて検討したい．(3)

## 2、元朝の継続と伝国璽

順帝が明に追われ，元政権の中心が応昌やハラホルムなどモンゴリアに移って以降，元朝に臣礼をとっていた高麗政権はこれを「北元」と呼んでいる(4)．ただしモンゴル側の史料で17世紀以降の年代記による限り，「北元 Umartu yuvan」などという記述は見られない．年代記に見られる呼称は基本的に「モンゴル Mongγol」，「モンゴル国 Mongγol ulus」，もしくは「大モンゴル国 Yeke Mongγol ulus」（『蒙古源流』Urga.66r）である．

これに対して明はモンゴルのことを決してモンゴル（蒙古）とは呼ばなかった．もっぱら「達達（韃靼）」と呼んでいるが，それは本来，宋代において北方のタタールを指す呼称である．モンゴル最初の年代記である『元朝秘史』が明初に翻訳された際にも，「忙豁」すなわち mongγo [1] の傍訳は「達達」であり（『元朝秘史』巻1，39a 葉他），また「忙豁勒真　兀魯昔」すなわち mongγoljin ulus の傍訳もやはり「達達百姓」である（同，巻8，24b 葉）．明朝がモンゴルのハーンを呼ぶ場合も「達達可汗」であり，決して「蒙古可汗」とは呼ばなかった．『明史』の編者が，「脱古思帖木児より後，部帥紛拏し，五伝して坤帖木児に至るにみな弑せられ，復た帝号を知らず．鬼力赤なる者有り．簒立して可汗と称す．国号を去りて遂に韃靼と称す，云々．」（同，巻327，5a-b 葉）というような誤解を起こしたのもそのためかもしれない．しかしモンゴル側は一度たりとも「国号」の「モンゴル」を棄てて「韃靼（タタール）」と称したことは無かった．

元朝が北遷したあと高麗王朝がこれを「北元」と呼んだことは先に紹介したが，明は決してそのように呼ぶことは無かった．すなわち明は「元」に代わって天命を受け天下＝中国を支配している以上，「元」はすでに存在しない政権であったからである．永楽帝が即位して間もなくモンゴルの鬼力赤に与えた書簡（『太宗実録』巻16，永楽元年2月己未）には次のように記されている．

> 元運既に衰え，我が皇考太祖天命を受けて天下を撫有す．朕は太祖の嫡子，藩を燕に奉じ，恭しんで天眷を承け，大統を入継し，嘉を万に與え，同に安楽に臻（いた）る．

とあり，太祖洪武帝がすでに天命を奉じて天下を支配していることを伝えている．天命が元から明に移っていることについては英宗の時代，モンゴルのタイスン・ハーン（脱脱不花）に与えた書簡（『英宗実録』巻100，正統8年正月壬午）に，より一層顕著に示されている．

> 迤北の使臣陛辞す．書を其の可汗に致して曰く，古より帝王の天下を主宰する者は皆天命を有す．如し天命の堯に在らば，則ち堯天下を主宰す．天命の舜に在らば，則ち舜天下を主宰す．歴代皆然り．宋以後に至りて，天命は大元に在り，則ち大元皇帝天下を主宰す．元の後，天命は我が大明に在り，則ち我が太祖皇帝天下を主宰す．自後聖聖相い承けるは皆これ上に天命を膺（う）く．これ豈人力の能く為す所や．（以下略）

ここでも明は元に代わって天命を受けて天下を支配していることが述べられており，従って，たとえ北のモンゴリアにおいてであろうとも「大元（元）」を名乗る政権の存在は認められなかったのである．これから約10年後の景泰3（1452）年，タイスン・ハーン（脱脱不花）はオイラトのエセン（也先）に追われ，チャブタン（沙不丹）の手にかかり殺害された．翌景泰4年，エセンは「大元田盛大可汗」の名で明に使節を派遣し，かつその書簡の中で，

> 往者元は天命を受け，今已にその位を得，盡く其の国土，人民，伝国玉宝を有す．（『英宗実録』巻234，景泰4年10月戊戌）

と記しているが，エセンが大元を継承し「大元大可汗」を称することは，先に述べたような事情で到底明側の受け入れられることではなかった．景泰帝はエセンに対する回賜の勅書で彼をどのように呼ぶかについて廷臣達に意見を求めた．種々の意見が出されたが，五府六部，翰林院，都察院，大理寺から，

> 古より王者は夷狄を治めず．今也先（エセン）称する所の大元田盛大［可汗］等の号は固より依る可からず．可汗の若きに至りては乃ち隋唐以来北狄の酋長の常称にして中国の禁ずる所にあらず．朝廷回賜の勅書，宜しく称して瓦剌可汗と為し，以て之を羈縻すべし．（『英宗実録』巻235，景泰4年12月癸巳）

という見解が出され，最終的にこれが認められている．すなわち「可汗」の称号は中国政権の禁じるものではないが，「大元可汗」の号は認められないこと，ただし「瓦剌（オイラト）可汗」であればよいというのである．

明が天命を受けて「大元」を継承して中国の正統王朝となった，ということは「伝国璽」の問題にも現れている．

「伝国璽」は中国を支配した王朝が代々受け継ぐもので、それを所持することが中国の正統な王朝の証しとされていた。ただしそれはあくまで建前であり、現実には次代の王朝にそれが受け継がれたかどうかは疑問視されている。北アジアの遊牧王朝に関して言えばこのような「伝国璽」の観念は全くない。しかし元朝が南宋を征服した時に宋室から「伝国璽」を獲得したことが記録されている(5)。これによって元朝は一面で中国王朝としての正当性を得たということになる。

元朝政権がモンゴリアに北遷したあと、その後のモンゴル政権と明朝政権との間にこの「伝国璽」をめぐって様々なやりとりが行われた。この事については胡鐘達（1984)、曹永年（1990)、岡田英弘（1996)、ゲレルト（1997）など既に多くの研究がある。この「伝国璽」に関わるモンゴル側と明側のやりとりについてはこれらの研究でほとんど言い尽くされており、新たな論点は無い。ただ「大元」と「伝国璽」とは密接な関係にあるので、これら先行の研究に依拠しつつ、また若干の重複を厭わず、これについて概略述べておきたい。

モンゴル年代記において「伝国璽」に相当するqasbuu（qas bau-a）tamaγ-aはチンギス・ハーンの生誕、もしくは即位の時に得られたという。その生誕時に得られたとするのは『アサラクチ史』の記述で、

> その朝から川の砂州にある一つの石の上で一羽の鳥が3日間飛び回って声を出した。イェスゲイ・バートルは、この子が生まれるや否やこの鳥が〔飛ぶのは〕一つの吉兆を持つ者である、としてイェスゲイ・バートルがその石を砕いてみれば、中にハスボー・タマガqasbuu tamaγ-a（玉璽）があった。（Шагдарсүрэн, Ц.，И сөн-го，2002, facsimile, 4b）

とある(6)。これに対して即位時に得たとするのは『蒙古源流』で、チンギス・ハーンが即位したときに、雲雀のような鳥が留まっていた石が、突然割れて、

> その中からハス・バウアqas bau-aという印璽tamaγ-aが、〔その〕長さと幅は1指尺、背には亀の上に2匹の龍が絡み合っていて、紋は彫ったように盛り上がった〔ものが〕出た。（Urga.29r）

と記されている。なおこの玉璽のその後の行方について二つの伝承がある。すなわち『蒙古源流』は順帝トゴン・テムルが明軍に追われて大都を脱出した際に、玉璽（qas bau tamaγ-a）を袖に入れて逃れたと記す（Urga.49r)。他方、著者不明『アルタン・トプチ』はこの玉璽はホトクト・ハーン（明宗、1329年即位、同年死去）の時にすでに失われたと記しており（北京版I、p.52)、順帝がそれを持って逃れたとは記していない。『アサラクチ史』によればその後、タイスン・ハーンの時に失われた玉璽をボヤン・セチェン・ハーンの時に得たという（Шагдарсүрэн，Ц.，И сөн-го，2002，facsimile，40a)。これについて岡田英弘（1996、p.85）は、「この“玉璽tamaγ-a”は政権を継承する玉璽であって、オイラトのエセン・ハーンにタイスン・ハーンが奪われたのをボヤン・セチェン・ハーンが取り戻したと言う意味である。」と述べている。ただこれら17世紀の年代記に記されているqasbuu tamaγ-aについてゲレルトゥ（1997，p.26）は「モンゴル帝国以来伝えられてきたチンギスという称号の命名譚にこれを付加したものであると言えよう。こうした操作が行なわれたのは、トゴン・テムル・ハーンが持ち出した「印璽」、すなわちイシバルジョルの言う通り、本来チンギス・ハーンとは無関係な伝国の璽の由来をチンギス・ハーンに結びつけるためであったのである。」と述べているが、その通りであろう。

しかし当時のモンゴル政権にとっても明にとっても「伝国璽」はもっと現実的な問題であったようである。先に紹介した研究の中でも紹介されているように、フビライの治世時、南宋を征服した至元13（1276）年、元将の伯顔が宋室から伝国璽を受け取ったという（『元史』巻127、伯顔伝)。順帝ウハガト・ハーンが明に追われ大都を逃れて内蒙古の応昌に移動したときに、この「伝国璽」を持って行ったことは間違いなかろう。明の太祖朱元璋はこの「伝国璽」を得ようとして連年モンゴリア遠征を行なったが得ることが出来ず、それを恥としたという（『明史』巻139、周敬心伝)。

この順帝が持ち出し、朱元璋が求めようとした「伝国璽」と同じものかどうかは分からないが、その後モンゴル側から明に対して「伝国璽」を入手したこと、そしてそれを明に献上したいという要望が何度か伝えられている。15世紀初め、東モンゴルで実権を握ったアルクタイ（阿魯台）はチムール朝の保護下にあった本雅失里（オルジェイトゥ・ハーン）をハーンに据えたが、間もなく西モンゴルのオイラトのマフムード（馬哈木）はこの本雅失里を殺害し、「伝国璽」を手に入れたという（『明太宗実録』巻73、永楽八年十一月丁未)。本雅失里、あるいは彼を擁立したアルクタイの所持していた「伝国璽」とはどのような由来を持つものかは分からない。しかしこの「伝国璽」はこれからしばらくモンゴリアの実権者に継承されていく。マフムードの死後「伝国璽」はその子トゴン（脱歓）に継承された。トゴンは間もなく東モンゴルに進出し、ライバルであったアルクタイを倒し、その玉璽を明に献上しようとしたという。

> 瓦剌順寧王脱歓（トゴン）、使臣昴克等を遣わし来朝貢馬す。且つ告ぐるに、已に阿魯台を殺し、前元の玉璽を献ぜんと欲す。（『宣宗実録』巻112、宣徳9年8月己巳）

もちろん明はそのような玉璽を受け取ることを拒否している。この「前元」の玉璽はトゴンからその子エセンに伝えられた。さらにこれは、景泰5（1454）年にエセンを倒

したアラク・チンサン（阿剌知院）の手に渡り、次いで景泰6（1455）年、アラク・チンサンを倒したボライ・タイシ（孛羅、孛来太師）と彼が擁立したマルコルギス・ハーン（麻兒可兒、馬可古兒吉思王子）の入手する所となった（『英宗実録』巻252、景泰6年4月戊戌）。

ボライ・タイシは景泰帝の後、復位した英宗を祝賀する使節を送り、改めて伝国璽を明皇帝に献上しようとしたという。しかし明側は以前と同様それを受け入れなかった。

> 迤北太師孛来、并に阿哈剌忽知院、上の復位を以て復た皮兒馬黒麻を遣わし来たりて奏すらく、宝璽を将(もち)って来献せんと欲すと。上、孛来に勅諭して曰く、先に爾の処、遣使進貢し、以て通誠し朝廷の寵信を款すること有り。特に都督馬政に命じて勅、并に綵段表裏を齎し、重ねて賜う。（中略）今、爾又使臣を使わし来り奏説するに、爾等、我が朝太宗皇帝の恩徳を念じ、伝国宝を将って来献せんと欲す。此意は嘉すべし。但し此宝已に其真を失う。真と雖も亦た是れ秦始皇の造る所、不祥の物にして、堯舜の伝うる所に非ず。況や我朝自ら祖宗所伝の真正の宝を有す。亦た此を用いず。其の進来か否かは爾の便に任従す。（『明英宗実録』巻278、天順元年5月丙寅）

要はモンゴル政権の持つ玉璽（伝国宝）は「真意」を失っているものであること、明王朝は「祖宗初伝の真正の宝」を所持しているのであり、モンゴル政権の持つ「伝国宝」はこちらに献上しても必要が無いというのであった。モンゴルの政権が「伝国璽」を保持していることは本来「大元」の支配者、もしくはその正当な継承者であることを意味した。従って天命を受けて「大元」に代わって中国に君臨していると主張している明王朝にとって「伝国璽」がモンゴリアにあるというのは認められるものではない。この時明朝がモンゴル側からの「伝国璽」の献上をきっぱりと拒否して以降、モンゴル側から「伝国璽」について伝えて来ることは無くなった。ただ「伝国璽」を保持することが政権の正統性を証明するものであるにもかかわらず、何度かモンゴル政権が「伝国璽」を明に「献上」しようとしたことは理解しがたい。恐らくモンゴル側にはそれによって明から与えられるはずの見返りの方が意味があったということであろう。

ついでながら元朝が保持していた「伝国璽」が後金国（清朝）の手に渡ったという記録がある。このことはすでによく知られていることであり、以下簡単に紹介する。

> 天聰9（1635）年8月、チャハル遠征に出かけていた和碩墨爾根戴青、貝勒多爾袞、貝勒岳託、薩哈廉、豪格らが歴代伝国の玉璽を獲得した。この玉璽は元朝の内裏にしまわれていたが、順帝が大都を放棄した際、彼はその玉璽を持って砂漠に逃れた。順帝が応昌府で亡くなった後、この玉璽は失われた。それから200年余り、ある牧人が山岡の下で一頭の山羊が三日も草を食べず、地面を蹄で蹴っているのを見た。牧人が掘ってみるとこの玉璽が見つかった。その玉璽は元裔であるトゥメト部のボショクト・ハン（第四代順義王）の手に帰したが、その後リグダン・ハーンのトゥメト部襲撃により、リグダン・ハーンの手に渡った。貝勒多爾袞らはこの玉璽がリグダン・ハーンの妃である蘇泰太后の所にあると聞き、これを彼女から入手した。その文をみると漢字の篆刻で「誥制之宝」と記されていた。璠璵を質とし交龍を紐とし、光気煥爛、洵(まこと)に至宝であった。（『清太宗実録』巻24、天聰9年8月庚辰）

「伝国璽」が発見された経過からして、この話自体は極めてうさんくさいものである。また記す所に依る限り、地中から発見された「玉璽」は、以前モンゴル政権が明に献上しようとしたものと異なることは明らかである。しかしその真偽はともかく、後金国（清朝）の太宗は元朝が所有していた「伝国璽」を入手し、「大元」の正統な継承者であることを表示したのである。

## 3、ダヤン・ハーンと「大元」

14世紀末、ウスハル・ハーンの死後、モンゴリアは政治的混乱に陥り、チンギス・ハーン家の力は衰え、政治的実権はトゴンやエセンなどのオイラトの支配者やサイトsayidと称されるチンギス・ハーン家以外の実力者の手に委ねられた。このような状況を一変させたのが15世紀末にモンゴルのハーンになったダヤン・ハーンDayan qaγanで、政治的に混乱したモンゴリアを統一し、チンギス・ハーン家の権威を復興したとされる。ダヤン・ハーンの意義はそれだけでなく、その後のモンゴルの王公の多くが彼を始祖としていることも重要な点である。にもかかわらずその事績については依然明確でない点が多い。例えばその生卒年、或いはハーンの即位年、在位年数、さらにはその名前についてさえ問題があり、種々の意見が出されている[7]。『アルタン・ハーン伝』によればダヤン・ハーンの即位は1480年頃であるが[8]、ダヤン・ハーンはそれから間もなく、当時実権を持っていたイスマイル（亦思馬因）らを打倒して権力基盤を固め（成化19（1483）年）、弘治元（1488）年5月、明に対して初めて使節を派遣した（『明孝宗実録』巻14、弘治元年5月乙酉）。この明への使節派遣は「今小王子、皇上の統を嗣ぐを以て、感恩向化し、使を遣わし入貢す。」（同、巻15、弘治元年6月癸卯）とあるように、明の憲宗の死後、孝宗（弘治帝）が即位したことを祝賀をするものであった。ただしそれが「感恩向化」によって使節を派遣してきた、というのは明側の勝手な解釈である。事実、こ

のとき明の皇帝に差し出した書簡は明側からは「書辞悖慢」として受け止められている。その際ダヤン・ハーンは「大元大可汗」と称したと記されている。その書簡は「番書」であったというからモンゴル文で記されていたことがわかる。「大元」はDayun〜Dayanであるが「大可汗」はどのように記されていたのだろうか。Yeke qaγanのかたちが考えられるが、17世紀以降に編纂されたモンゴル年代記などではこのような表現は見られない。単にDayun qaγan〜Dayan qaγanとのみ記される。

ダヤン・ハーンはその後もしばしば明に使節を派遣しているが、明側の記録には以後「大元可汗」の称号は見られない。明は彼を「迤北伯顔猛可王」、あるいはこの時代のモンゴルのハーンに対する独特の呼称である「小王子」の名でしか呼んでいない[9]。恐らくダヤン・ハーンはその後も「ダヤン・ハーン（大元可汗）」の名で明に書簡を送ったと思われるが、明はこれを無視したのであろう。

このダヤン・ハーンDayan qaγanのDayanが何を意味するかについて若干の議論があった。これについて烏蘭（1990）はそれまでのDayan〜Dayunに関する説を整理して、基本的にこれが「大元」を意味するもの、と結論した。これに対して蔡美彪（1992）は烏蘭説を批判し、Dayan qaγanは「大元可汗」の意味ではなく、「全国汗あるいは全蒙古汗」の意味であると主張した。たしかにdayanには「全ての、全体の」という意味がある（Lessing, 1960, p.223）。しかし烏蘭は古くから見られるDayan qaγanを「天下の主」とする説は『シャラ・トージ』に最初に見られるもので、その後も幾つかの文献でdayanについて同様の解釈が見られるが、すべて後人の一種の俗詞源的解釈であると批判し、改めてDayanは「大元」を意味するものとした（烏蘭、2000、p.350、注85）。これらの議論についてはここでは繰り返さないが、前節でも述べたように、モンゴルの政権は元朝伝来の玉璽を所有している、と繰り返し伝えていることからも、Dayun〜Dayanは烏蘭の言うとおり、本来「大元」を意味したとすべきであろう。

ところでDayan qaγanのDayanが本来「大元」を意味したことは間違いないが、そのことと17世紀以降のすべての年代記作者がDayanを「大元」であると理解していたということを意味するものではない。『蒙古源流』はダヤン・ハーンの即位について次のように記している。

> そのとき伯母マンドハイ・セチェン・ハトンは戊午（1438）年生まれ、その33歳のときに、甲申（1464）年生まれのバト・モンケが7歳のときに〔その〕妻となり、互いに頼って、同じその庚寅（1470）年に「Dayan ulus（大元国）を支配することになるがよい。」とダヤン・ハーンDayan qaγanと名付け、エシ・ハトンの前でハン位に即かせた。（Urga.62v）[10]

これと同じことを『シャラ・トージ』は次のように記している。

> バト・モンケが7歳のときに、マンドハイ・ハトンがその33歳の時に〔バト・モンケ〕の妻となり、互いに頼って、寅の年（1470）年に「すべてdayan bügüdeを支配することになるがよい。」と言ってバト・モンケ・ダヤン・ハーンBatu möngke Dayan qaγanと名付けて、エジェンejen（＝チンギス・ハーン）の〔八〕白室の前でハンに即位した。（Шастина, 1957, стр. 72）

『シャラ・トージ』は『蒙古源流』の記述をかなり利用しているが[11]、この箇所は『シャラ・トージ』の編者がdayan ulusのdayanを「全体の」の意味に取り、同じような意味を持つbügüdeを加えてdayan bügüde（すべて）としたのである。問題なのは『シャラ・トージ』の編者が『蒙古源流』の当該箇所を誤解したのかどうかである。一体サガン・セチェンは「大元」についてどのような情報を持っていたのであろうか。『蒙古源流』ではダヤン・ハーンの事績について記した文章の最後で、

> それからダヤン・ハーンは六万戸の国を集め整えて、全ての大モンゴル国Narbai Yeke Mongγol ulusを平和にし、楽しませた。（Urga.66r）

と記されており、彼が統一した政権を「大モンゴル国Yeke Mongγol ulus」と言い、「大元国」とは言っていない。すなわちサガン・セチェンの認識においては、分裂していたモンゴリアをダヤン・ハーンが統一してそこに六万戸の制度を確立した国家は、「大元」ではなく「大モンゴル国」であった。そもそも『蒙古源流』にはフビライが「大元」の創建者であったことは全く記されていない。サガン・セチェンが記すフビライの事績の概要は以下の通りである。

> それから〔モンケの〕弟のフビライ・セチェン・ハーンは己亥（1199、正しくは乙亥、1215）年生まれ、その46歳の庚申（1260）年にハン位に即いて、その50歳の甲子（1264）年より辛未（1271）年に至るまで、8年間、夏の夏営地、上都開平府、冬の冬営地、大いなる大都城、アルタイの北のアラルのチャガン城、エルチュギのランティン城という4つの大いなる大都城を建設し、すべての大いなる国たみを納めて、4つの大いなる政治を平穏にして、四方を動揺させず、八方を揺るがさず、すべての方向を識別して、総じて全てを平和にさせた。（Urga.43v）

ここには弟のアリクブハと争ってハーンの位を得たことも、南宋を征服したことも、ましてやモンゴルの国号を大元に変えたことも全く記されていない。この点に関しては17世紀に編纂されたモンゴル年代記もまったく同様であ

る。『蒙古源流』は他の年代記に比べてフビライの事績を比較的多く記してはいるが、そのほとんどはチベット仏教に関係したもので、政治的活動については何も記していない。また『蒙古源流』は中国を支配下に入れたのはチンギス・ハーンであった、としており(Urga.33r)、フビライの中国支配については言及がない。著者不明『アルタン・トプチ』もフビライについては、あくまでチンギス・ハーンによって建てられたモンゴル国の後継者の一人としてしか記しておらず、「大元」の創建者であることは全く記していない。その事績も、生卒年と在位年以外に、僅か、順帝トゴン・テムルが大都を追われた際に詠ったとされる「順帝悲歌」の中に、「大都城」の建設者として記されているだけである(北京版 I, p.58)。その意味で『アルタン・トプチ』の著者やサガン・セチェンが「大元」という王朝の名も、またそれがフビライによって創建されたものであることを認識していたのかは疑わざるを得ない。

『蒙古源流』に記されている Dayan ulus の dayan について最初に見解を示したのはシュミット、I.J.である。『蒙古源流』のモンゴル語写本は19世紀の初めロシアにもたらされたが[12]、シュミットはそのモンゴル語テキストとドイツ語訳を付して公刊した。一般にシュミット本と呼ばれる(Schmidt, 1829)。彼はそのドイツ語訳で、当該部分を「全民族 gesammten Volkes の支配者になることを願って、彼にダヤン・ハガンの名を与えた。」と訳している(ibid. p. 181)。ウラディーミルツォフもダヤン・ハーンの名称について検討を試み、シュミット訳の当該部分を紹介すると共に、『シャラ・トージ』の文章を紹介し[13]、また dayan という言葉は文語モンゴル語、文語オイラト語や色々な口語モンゴル語、口語オイラト語にも見られ、意味は「あらゆる、全ての、各々の」という意味を持っていること、従って Dayan-qaγan の意味は「全人民のハン」であるとしている(Владимирцов、再録、2002、стр. 218-219)。この見解自体は先に紹介したように烏蘭によって否定されている。しかし『蒙古源流』の大元に関する言及がほとんど無いことからしてサガン・セチェンが Dayan ulus を「大元国」ではなく、「すべての国」という意味で理解していた、ということは十分あり得る。そうだとすれば上に紹介した『シャラ・トージ』の編者は『蒙古源流』の記述を誤解したのではなく、その意味がより明確になるように bügüde(すべての)の一語を加えたと考えられる。

周知のように『蒙古源流』は乾隆帝の時代に殿版のモンゴル語テキストが編纂され、さらにそれから満洲語に翻訳され、さらに満洲語から漢訳された。その際 dayan という言葉はいずれにせよ正しい意味には訳されていない。すなわち満洲語訳の当該部分は

この庚寅年に、ダヤン国 Dayan gurun を支配するように、とダヤン・ハン Dayan han と名付けて、(江実、1940、満文テキスト、84頁)

と記されている。また『蒙古源流』の漢訳部分も、

満都海徹辰福晋、戊午年生に係る。年三十三歳、巴図蒙克甲申年生に係る。年七歳、定めて夫婦となる。本年庚寅、達延国を佔拠せんと欲するに因り、遂に称して達延汗となる。(『蒙古源流箋証』巻5、30a 葉)

とある。いずれにせよ満洲語訳の Dayan もその漢語訳の達延もモンゴル文の Dayan を機械的に音訳したに過ぎず、「大元」あるいは「すべての」というような、この言葉の意味するところを理解して訳しているわけではない[14]。

ところでダヤン・ハーン以後の「大元」の問題について若干触れておきたい。一つにはダヤン・ハーン以後も「大元」の称号を唱えたハーンがいたことである。岡田英弘(1996, p.85)も指摘しているように、それはダヤン・ハーンの6世孫で、またリグダン・ハーンの祖父にあたるボヤン・セチェン・ハーン(在位1593-1603)である。このボヤン・セチェン・ハーンについて『アサラクチ史』は、

トゥメン・ジャサクト・ハーンの子ボヤン・ダユン・セチェン・ハーン Buyan dayung sečen qaγan が大位に即いた。タイスン・ハーンが失った玉璽を取って、平和なる政権を打ち立てて、大いなる国たみを楽しませた。ダユン・セチェン・ハーンの子、マングス・タイジはハーンに即かずに亡くなった。(Шагдарсрэн, Исөн-гю, 2002, 40a)

と記している。ボヤン・ダユン・セチェン・ハーンのダユン dayung は「大元」を意味するとみてよい。ただしボヤン・セチェン・ハーンにダユン dayung の称号を付しているのは17世紀に編纂された年代記では『アサラクチ史』しかなく、著者不明『アルタン・トプチ』、『蒙古源流』、ロブサン・ダンジン『アルタン・トプチ』のいずれもボヤン・セチェン・ハーンとしか記していない[15]。その意味でボヤン・セチェン・ハーンが Dayung(大元)の号を唱えたと断定することには躊躇を覚えるが、その可能性は否定できない。

もう一つはアルタン・ハーンの王国の名である。『アルタン・ハーン伝』にはアルタン・ハーンが明と和平を結んだときのこととして次のように記されている。

無量なるアルタン・ハーンを始めとする〔右翼〕三万戸のノヤン等は、
禁令を作って中国とモンゴルの和平を互いに語り合って互いに守り合って、
大いなる宝物や交易を望んだことを受けて、
辛未(1571)年に Kkir naγur の北の Egüden čol という名の地に戻り下馬した。
それより後、中国とモンゴルの大いなる平和を定めて、等しく大いなる国たみは足を地に、手を大地に〔つけ

て〕休息して、

Dayun yeke ulus（大元国）を一層大いに楽しませて、太平の大いなる和平を定めたことはそのようであった。（珠栄嘎、1991，p.232、125節）

ここで注目されるのは、アルタン・ハーンを中心とする「右翼三万戸」のノヤンらが、「Dayun yeke ulus」を大いに楽しませた、と記していることである。『アルタン・ハーン伝』でも基本的に国名はモンゴルと呼んでおり、「Dayun yeke ulus」の名が出てくるのはここだけである。本来「大元」の正統な支配者はチャハル王家の長であって、当時それと政治的に独立していた、傍系のアルタンが自らの国を「大元」と呼ぶことはあり得ない[16]。『アルタン・ハーン伝』が編纂されたのは内モンゴルが清朝（後金国）に支配される前のことであったが[17]、『アルタン・ハーン伝』の著者には「大元」王朝が依然として存在していたという認識があったと言うことであろう。

## 4、リグダン・ハーンと dayiming の称号

リグダン・ハーン Ligdan qaγan（リンダン・ハーン Lindan qaγan～Lingdan qaγan、在位1604-1634年）はモンゴル正統の最後の大ハーンであったが、「大元」の名の記憶との関連で彼の唱えた称号について興味がある。リグダン・ハーン自身の事績についてはすでに数多くの研究があるが[18]、以下簡単に紹介しておく。彼は1592年、マングス・タイジの長子として生まれたが、マングス・タイジはその父ボヤン・セチェン・ハーンの在世中に死去した。このため、リグダンは祖父ボヤン・セチェンの亡くなった翌年、1604年に13歳でハーンに即いた（Urga.68r）。即位当初は明から「幼憨（ハン）（リグダンのこと）嗣立するも、懦弱にして未だ威ならず。」（『明実録』万暦35年7月壬辰）と評価されたが、その後成長するに従って力を持つようになり、それから10年後には「虎墩兎憨（ホトクトハン）、虜中の名王となる。尤も桀驁と称す。」（『明実録』万暦45年5月辛未）と、その評価は一変した。間もなくリグダン・ハーンは政治的に分裂していたモンゴリアの統一活動を行う。しかしながらこの活動は武力行動を伴うもので同族のモンゴル諸公の反発を買い、モンゴリア東部の諸公は新興の満洲族の国家、後金国のヌルハチに保護を求めるようになった。この事からリグダン・ハーンとヌルハチ、またその後継者の太宗ホンタイジとの対立が深まった。1628年にはトゥメト王国とその属下にあったハラチン部を攻撃してこれらを壊滅に導き、フフホトを占拠した。他方リグダン・ハーンはチベット仏教のカルマ派を信奉し、仏教の保護にも務めたが、1630年代初め、青海地方でのゲールグ派とカルマ派との勢力争いに介入し、カルマ派の応援のために青海地方へと遠征した。この間、1632年に後金国の太宗ホンタイジは内蒙古の政治的空白に乗じてフフホトを占領した。その後リグダン・ハーンは青海遠征中に天然痘に罹り、1634年にシラ・ターラで死去した。在位31年、43歳であった。

このリグダン・ハーンの称号について様々な形で伝えられている。『蒙古源流』では単に Lingdan qutuγtu qaγan としてしか記されていないが（Urga.91r）、リグダン・ハーンが天命5（1620）年10月22日に対立を深めていた後金国の太祖ヌルハチに送った書簡の中では自ら「Döčin tümen Mongγol-un ejen Baγatur Činggis qaγan（四十万戸蒙古の主、英主チンギス・ハーン」と唱えている（『大清満洲実録』1964年、台湾影印版、pp.279-280）。「四十万戸」というのはモンゴル帝国時代のモンゴルを象徴する表現と考えられるが[19]、リグダン・ハーンは自らチンギス・ハーンの称号を背負いモンゴリア最高の君主であることを誇示したのである。

しかしながらリグダン・ハーンの正式な称号はもっと長く、複雑であった。その全体の称号は『アサラクチ史』に記されている以下のような称号であったとされている。

Lindan qutuγtu sutu Činggis dayiming sečen jüg-üd-i teyin büged ilaγuγči, bala čakarvati dai tayisung tngri-yin tngri delekei dakin-u qurmusda, altan kürdün-i orčiγuluγči nomun qaγan（リンダン・ホトクト、強力なるチンギス大明賢者、諸方の最勝者、強力なる転輪王、大太宗、天の天、世界の帝釈天、転金輪王、法王）（Шагдарсүрэн, Ц, 2002, facsimile, 40b）

この称号は『シャラ・トージ』やロブサンダンジン『アルタン・トプチ』にも引用されているが、一部異なっている（森川哲雄、2002、p.23）。この長々しい称号の中で注意されるのは dayiming の号である。dayiming は一般には「大明」で、明王朝を意味する。しかしリグダン・ハーンの称号の一部であるこの dayiming の意味について、早くウラディーミルツォフは「明朝」の意味ではなく「偉大な」という意味であると解釈している（Владимирцов, 2002, стр. 220）。セロイス（Serruys, 1958、p.27）、薄音湖（1998、pp.182-184、2004、pp.91-92）もこのウラディーミルツォフ説に賛同している。しかしながら17～18世紀に編纂された年代記において dayiming が「偉大な」という意味で一般的な形容詞として使用されている例は無い。王朝としての「大明」を指す以外には、ほとんど個人の、それも大半はリグダン・ハーンの称号として用いられているだけである。その意味で dayiming はやはり王朝としての「大明」を意味しているのである。すなわち中国を長い間支配していた明朝、つまり「dayiming」を権威付けの象徴として自らの称号に加えたと考えるべきである。

リグダン・ハーンはまたモンゴリアにおけるチベット仏教の普及に功績があったとされる。中でも17世紀初めにおけるチベット大蔵経、『カンジュル（甘珠爾）』のモンゴル語訳は彼の命によって完成したとされる。現存するモンゴル語訳『カンジュル』の経典の多くの奥書にはその訳者と共にリグダン・ハーンの名が記されている。またその奥書には『カンジュル』がリグダン・ハーン治世の1628年から1629年の間に翻訳されたとも記されている。ただし膨大な量のカンジュルをこれほど短期間に翻訳することは不可能であり、これについては疑問が出されている。すなわちモンゴル語訳『カンジュル』にリグダン・ハーンの名が記されているのは、すでにモンゴル語訳されていた『カンジュル』の中に、本来記されていた庇護者の名を削り、代わりにリグダンの名を入れたのであろうという（ハイシッヒ、1967，p.161）。

現在知られている代表的なモンゴル語訳カンジュルはロシア東洋学研究所、サンクトペテルブルク支部所蔵の、リグダン・ハーン治世時に「翻訳された」とされる写本（以下サンクトペテルブルク写本）と、それから約100年後の1718～1720年に康熙帝の命により改訂がなされ、木版印刷された北京版カンジュル（以下北京版）である。これらのモンゴル語訳カンジュルの奥書について、前者にはКасъяненко（1993）の、後者にはLigeti（1942）の研究とその内容の紹介がある。サンクトペテルブルク写本の、883点の経典の内、その奥書の中にリグダン・ハーンの名は60数カ所見られるが、様々な称号で記されている。ただしその中にはリグダンの名が直接記されない例も多い。例えば、Dai erketü kümün-ü ejen delekei dakin-u qurmusda（大いなる力ある人の主、世界の帝釈天）、あるいはDegedü nom-un mergen čakrabad (čakravad)-un qutuγtu Činggis qaγan（尊き仏法の賢き転輪王のホトクト、チンギス・ハーン）等々である（Касъяненко，1993，стр.59，66）。なお先に紹介した『アサラクチ史』に記されている称号と完全に一致するものは見られない。

ところでこのサンクトペテルブルク写本と北京版の奥書に記されているリグダン・ハーンの称号を比較すると、一部に相違が見られる。その中で特に興味あるのはdayimingの称号についてである。サンクトペテルブルク写本ではdayiming（もしくはdai ming）の称号を持ったリグダン・ハーンの名は15カ所見られるが（上段）、これをLigetiによって紹介されている北京版（下段）と対応すると以下のようになる。

(1) Tom 1, Dandir-a I, 11(11) (Касъяненко, стр.27-28)
Tom 1, Dandr-a No.11(11) (Ligeti, p.5)

(2) Tom 17, Dandir-a XVII, 268(1) (там же, стр.90)
Tom 23, Dandr-a XXII, No.XXII, (ibid., p.120)

(3) Tom 39, Qorin tabun mingγatu I, 536(1) (там же, стр.149)
（該当文無し）

(4) Tom 58, Erdeni dabqurliγ V, 581(8) (там же, стр 175-176)
Tom 52, Erdeni dabqurliγ V, No.819(8), (ibid. p.202)

(5) Tom 75, Eldeb III, 617(1) (там же, стр.199)
Tom 62, Eldeb II, No. 850(1), (ibid. p.217)

(6) Tom 76, Eldeb IV, 621(4) (там же, стр.200)
（該当文無し）

(7) Tom 78, Eldeb VI, 632(2) (там же, стр.204)
Tom 66, Eldeb VI, No.867(3)), (ibid. p.225)

(8) Tom 84, Eldeb X, 667(5) (там же, стр.214)
Tom 83, Eldeb XXIV, No.1019(1), (ibid. p.274)

(9) Tom 88, Eldeb X, 733(10) (там же, стр.228)
Tom 88, Eldeb XXIX(11), (ibid. p.290)

(10) Tom 90, Eldeb XVIII, 738(2) (там же, стр.231)
（該当文無し）

(11) Tom 91, Eldeb XIX, 748(9) (там же, стр.233)
Tom 79, Eldeb XX, No.987(11) (ibid. p.264)

(12) Tom 94, Eldeb XXII, 758(2) (там же, стр.237)
（該当文無し）

(13) Tom 97, Eldeb XXV, 815(1) (там же, стр.247)
Tom 64, Eldeb V, No.861(1) (ibid. p.222)

(14) Tom 103, Eldeb XXXI, 852(13) (там же, стр.260)
Tom 92, Eldeb XXXIII, No.1123(13), (ibid. p.304)

(15) Tom 106, Eldeb XXXIV, 874(9) (там же, стр.265)
Tom 60, Eldeb II, No.852(3), (ibid. p.218)

これら15カ所のうち、北京版では(3)、(6)、(10)、(12)に対応する記述が無い。これが何故なのかは分からないが、問題なのは(1)、(2)、(11)に記されるサンクトペテルブルク写本と北京版のリグダン・ハーンの称号についての相違である。以下それを比較してみよう[20]。

(1)サンクトペテルブルク写本

Kürdütü čakravarti-tur adali yosutu : gün biligtü boloγad gegegen uqaγ-a-tu : kümün erketü Lindan qutuγdu dayiming sečen qaγan

（Касъяненко，1993，стр.27-28）

北京版

Kürdü-tü čakravarti-dur adali yosutu：gün bilig-tü boluγad gegegen uqaγ-a-tu：kümün-ü erketü Lindan qutuγ-tu tai yuwan sečen qaγan（Ligeti，1942，p.5）

(2)サンクトペテルブルク写本

Kümün-ü erketü Lindan qutuγ-tu baγatur Činggis dai ming sečen jüg-üd-i teyin böged ilaγuγčin čakravarti delekei-tekin-ü qormusda dai tayisun qaγan（Касъяненко，там же，стр.90）

北京版

Kümün-ü erketü Lendan qutuγ - tu baγatur tayiyuvan sečen qaγan（Ligeti, ibid., p.120）

(11)サンクトペテルブルク写本

Qutuγ-tu dai ming Činggis qaγan（Касъяненко，там же，стр.233）

北京版

Qutuγ-tu tai yuwan Činggis qaγan（Ligeti, ibid., p.264）

リゲティによる北京版の転写には表記のゆれが見られるが、それはともかく波線の部分について、サンクトペテルブルク写本の記す、dayiming が北京版の当該箇所では tai（tayi）yuwan、すなわち「大元」になっている。但しサンクトペテルブルグ写本に記される dayiming が北京版ですべて tai yuvan（Dai yuvan）になっているわけではなく、(4)、(5)、(7)、(8)、(9)、(13)、(14)、(15)など大半はそのまま dayiming（tayiming）の形が踏襲されている。

他方一カ所だけこれとは反対の記述が見られる。すなわちサンクトペテルブルク写本、Tom 23，Dandir-a XXIII, 413(99)（Касъяненко，там же，стр.116）には、

Tngri boγda čakiravadi Lindan qutuγ - tu：tay yuvan Činggis qaγan

と記されているのに対し、北京版（Dandir-a XIV, No. 289（112），Ligeti, ibid. p.75）では、

Tngri boγda čakiravadi Lindan qutuγ-tu：tayiming Činggis qaγan

となっている。ここに紹介した波線で示した dayiming と dai yuvan の称号の相互の修正をどう解釈したらよいのであろうか。基本的にリグダンの正式な称号の一部に dayiming（大明）の称号が含まれていたことは間違いない。前者の dayiming → tai yuwan（dai yuvan）への修正に関して言えば、北京版の改訂の際にそれに携わった編者は、dayiming を「偉大な」ではなく、前王朝の「大明」として理解していたと考える。そのため恐らく一部の編者は、チンギス・ハーンの称号と併せ用いられていることから、それは相応しくないとして、意図的に dai yuvan、すなわち「大元」に変えたのであろう。これは次章でも触れるように、北京版が編纂された時代、すなわち18世紀前半にはモンゴル知識人が『元史』などを直接目にすることによって、彼らの祖先が創建した「大元国」についての知識を持つようになっていたからである。他方後者の、サンクトペテルブルク写本に day（dayi）yuvan と記され、北京版では dayiming と修正されていることについて、その理由は明確でないが、一つの考え方として、サンクトペテルブルク写本編集の際に編集者の一部が「大元」についての知識を持ち、リグダンの称号を敢えて dayiming ではなく dayi yuvan としたが、北京版を編纂する時にこの経典の校訂に携わった者が、他の箇所では多く dayiming と記されているのでそのように修正したのではなかろうか。この考えはやや牽強付会的なところもあるが、一つの解釈としてあり得よう。いずれにせよリグダンの称号の一部である dayiming は、ウラディーミルツォフの言うように「偉大な」という意味を持っているのではなく、中国王朝の「大明」を意味し、リグダンがその権威を利用しようとして付けた称号であることは間違いない。つまりそれはリグダンがチンギスの称号を自らに付したように、それによって自らの威光をモンゴリア全土に知らしめようとしたのである。

ところでこれに関連して『蒙古源流』は二カ所だけチンギス・ハーンに dayiming の号を付して呼んでいる。例えば彼が金朝と戦ったときのこととして、

戊戌の年より137年経った甲寅年にモンゴルのチンギス・ハーンは中国のマンズ・アルタン・ハーン Manzu Altan qaγan を追い出して、政権を取って、その33歳の甲寅の年に赤い国、80万戸中国の13州をその力に従えた後、ダイミン・ソト・ボグダ・チンギス・ハーン Dayiming sutu boγda Činggis qaγan とて有名になった。（Urga.35r）

と記している。もちろんモンゴル帝国、元朝時代、チンギス・ハーンにはこのような称号は無く、武宗、至大2（1309）年に最終的に追贈された諡は「法天啓運聖武皇帝」である（『元史』巻1、太祖）。実のところ16-17世紀においてもチンギス・ハーンに dayiming の称号を付して呼ぶことは無かった。例えば内蒙古のオロンスムで発見された碑文（通称アルタン・ハン碑文）は1594年ころ、アルタンの孫とされるダイチン・ノヤン Dayičing noyan 等によって建てられたものであるが、そこでは単に Sutu Činggis qaγan と記されているだけである（Heissig, 1966，pp.15-17）。またかつて内蒙古、バーリンの白塔子にあった、リグダン・ハーン治世の1626年に作られた碑文にも、

長生天のスルデに頼って大いなる功徳の威厳により明

らかにより高まったモンゴル・チンギス・ハーン Mongγol Činggis qaγan と有名になった、その36番目のハンの御代に菩薩の化身、法輪を回す者、ダイミン・セチェン・チンギス・ハーン Dayiming sečen qaγan が生まれた。(Позднеев, 1898, том II, стр. 384)

と記されており、リグダン・ハーンに対してはダイミン・セチェン・チンギス・ハーンと呼んでいるが、チンギス・ハーン自身には何の称号も付けられていない[21]。要するに上記の『蒙古源流』の記述は、リグダン・ハーンが Dayiming Činggis qaγan と唱えたのに引きずられ、誤って祖先のチンギス・ハーンにも dayiming の称号を付けたに過ぎないのである。

以上本章ではモンゴル語訳カンジュルの奥書に記されているリグダン・ハーンの称号のうちの dayiming の称号について検討した。その本来の意味はやはり明朝の国号である「大明」であり、それを自らの称号に加えて自分の力を一層誇示し、モンゴリアの政治的統一をより速やかに進めようとしたのである。のちに康熙時代に改訂され木版印刷された際(北京版)、数カ所、dayiming が dayi yuvan に変えられたのは、次節でも述べるように、18世紀になってモンゴル知識人が漢語史料、とりわけ『元史』などを直接見ることによって「大元」の存在を再確認し、そのためにモンゴルの支配者であったリグダンの称号は「大明」よりは「大元」の方が相応しいと考えたためであろう。

## 5、18世紀に編纂されたモンゴル年代記における大元の記述

『元朝秘史』の編纂以後長い間の空白を経て17世紀にはモンゴル年代記が編纂されるようになったが、その理由の一つは16世紀後半にチベット仏教がモンゴリアに再流入し、それと共にチベットの史書を含む多くのチベット語文献が入ったことによってモンゴル知識人がその刺激を受けたためである。もう一つは17世紀にモンゴリアは清朝の支配を受け独立を失ったが、そのことはモンゴリアに長い間君臨してきたモンゴル支配者層に危機感を呼び、あらためて自分たちの歴史に対する関心を呼び起こしたためであると考える。

17世紀に編纂されたモンゴル年代記のうち、その前半に編纂されたと考えられる『アルタン・ハーン伝』や著者不明『アルタン・トプチ』はそれらがどのような史料に基づいて編纂したのかを示していない。著者不明『アルタン・トプチ』には『元朝秘史』と一致する記述があり、その意味では『元朝秘史』を利用したとも言えるが、『元朝秘史』が15〜16世紀のモンゴリアの政治的混乱の中でどのように伝えられたのかは明らかでない。著者不明『アルタン・トプチ』の『元朝秘史』と一致する記述は口承によって伝えられたという見解もある(Бира, 1978, стр.213)。

『アルタン・ハーン伝』にせよ著者不明『アルタン・トプチ』にせよ漢文史料を利用した形跡はほとんど無い。後者には確かにフビライ・ハーン以降の元朝のハーン(皇帝)に関する記述はあるが、ほとんどが生卒年代、ハーンの在位年代の記述に終わっている。またハーンの称号もモンゴル語の名、諡は記されているが、漢語の廟号などは記されていない。これに対して1662年にオルドスのサガン・セチェンによって編纂された『蒙古源流』にはその奥書に7種の史料を利用したことが記されているが(Urga.96v-97r)、その一つに Erdem-ten-ü sedkil-i geyigülküi sečeglig kemekü kitad-un šastir(『学者たちの考えを輝かせる花園』という中国の論)が示されている。kitad-un šastir と記されていることから、これは中国史料であるらしいが、これが何に当たるのか全く不明である。

ところで『蒙古源流』には他の年代記には記されていない、漢から金までの歴史が記されている(Urga.33r-35r)。とは言ってもそこにそれほど歴史的事件が記されている訳ではない。この中で比較的詳細に記されているのが唐の歴代皇帝の生卒年代、在位年代であるが、その他の歴史事件についてはほとんど見るべきものはない。もちろん歴代の皇帝の名前について、例えば後漢初代の皇帝を Lyu güngbü(劉光武)とか隋の煬帝を Sui Yangdai とか、唐の中宗皇帝を Tang Zozung qaγan、睿宗皇帝を Tang Yizung qaγan などと記しているのは漢文史料に依ったものである。しかしこの程度の記述ではどのような史料を利用したのかを特定できない。

『蒙古源流』は元朝のハーン(皇帝)の事績についても、フビライ・ハーンとパクパ・ラマとの関係以外にさほど記していない。興味あるのは元朝の歴代の皇帝が帰依処(takil-un oron)にしたラマについて記していることである。ただ『元史』巻202、釈老伝にもフビライ・ハーン以降の「帝師」について記されているが、『元史』の示す帝師と『蒙古源流』の示す帰依処の名前はフビライ・ハーンとパクパ・ラマの組み合わせ以外は全く合わない。『蒙古源流』が何に依拠して元朝皇帝の「帰依処」の名を記したのかは分からないが、このことは「帝師」について『元史』などの漢文史料を参照していないことを示している。

この点はシャムバ・エルケ・ダイチンの『アサラクチ史』(1677)やロブサン・ダンジン『アルタン・トプチ』も同様である。元のハーンの事績については著者不明『アルタン・トプチ』とほとんど同じ記述をしており、独自なものはない。おそらくこのことに関しては漢文文献との接触はほとんど無かったとみてよい。『シャラ・トージ』の編者にして然りである。清朝初期に『遼史』、『金史』と共に『元

史』も満洲語訳され、さらにモンゴル語に翻訳されたが[22]、このモンゴル語訳された『元史』がすぐに一般のモンゴル知識人の目に触れるような状況に無かったであろう。

しかしながらモンゴリアに対する清朝の支配が浸透していくに連れ、モンゴル知識人を取り巻く言語状況は大きく変わっていった。母語であるモンゴル語は当然のこととして、支配者満洲人の言語である満州語の習得は必須となり、信仰するチベット仏教の経典を通してのチベット語や、漢文化との接触により漢語の習得者も多く出てきた。これらのことは18世紀におけるモンゴル年代記の編纂にも反映されることになり、その中に以前は見られなかった「大元」の名が明確に記されるようになるのである。

18世紀に活躍したモンゴル人科学者にミンガト(明安図、1692-1764)がいる。彼は蒙古正白旗の出身で、康熙49(1710)年に北京の欽天監の学生となり、天文、暦法、数学などを勉強したという。後に欽天監に勤務し、暦書である「時憲書」の校訂とその満文、蒙文への翻訳を行ったり、自然科学書、例えば『律歴淵源』などの編纂を行ったという(『清代人物伝稿』上編、第十巻、p.294)。興味あるのは、18世紀前半に編纂された年代記編者の多くがミンガトと同じように都の北京で何らかの公務に就いていることである。

18世紀前半に編纂されたモンゴル年代記としては『ガンガイン・ウルスハル』(1725年)、『蒙古世系譜(Mongγol borjigid oboγ-un teüke)』(1735年)、『アルタン・クルドゥン・ミンガン・ケゲストゥ・ビチク』(1739年)が知られている。このうち『ガンガイン・ウルスハル』の著者ゴムボジャブ Gömböjab はウジュムチン王家の出身で、康熙年間後半に北京に行き、その後雍正帝の命により北京にあった「西番学総理(チベット語学校長)」に任じられている。彼はモンゴル語、満洲語の他にチベット語、漢語にも通じていた。その後チベット文『中国仏教史』を編纂、またチベット文『テンギュル(丹珠爾)』をモンゴル語に翻訳するための辞書『メルゲト・ガルヒン・オロン Merged γarqu-yin oron』の編纂にも参加したという(以上 Пучковский, 1960、金岡秀郎、1987、喬吉、1994)。『蒙古世系譜』の著者ロミ Lomi はダヤン・ハーンの第3子バルス・ボロトの後裔で、その正確な生卒年については不明であるが、納古単夫によれば1665-1740年頃という。ロミは北京で理藩院郎中や直隷布政使などの任務に就いたあと蒙古鑲白旗副都統、蒙古鑲紅旗都統の任に就いている(以上、包文漢、喬吉、1994の納古単夫の記述、pp.110-112)。さらに『アルタン・クルドゥン・ミンガン・ケゲストゥ・ビチク』の著者シレゲトゥ・グーシ・ダルマ Siregetü güüsi dharma はチベット語の経典である『テンギュル(丹珠爾)』のモンゴル語訳に従事したほか、『ガンガイン・ウルスハル』の著者ゴムボジャブと同様に、『メルゲト・ガルヒン・オロン』の編纂に参加している(Heisssig, 1959, pp.125-137)。ゴムボジャブ、ロミ、シレゲトゥ・グーシ・ダルマのいずれも漢語に通じていた。ロミは『蒙古世系譜』を最初、漢語もしくは満洲語で書いたという見解もある[23]。このためにこれらの3つの年代記の元朝のハーンについての記述はそれ以前の年代記に見られる記述と全く違っている。

『ガンガイン・ウルスハル』はフビライの事績について次のように記している。

> 憲宗ハーンと同母弟の世祖聖徳神功文武皇帝セチェン・ハーン・フビライ、乙亥(1215)年生まれ、その46歳の庚申(1260)年、中統元年にハン位に即いた後、文武に熟練し、探求した大臣、役人達を総じて用いて、チベット、中国、安南、交趾、Gyi pen、扶桑、八百媳婦国等々、四海の内外を全てその力に集めた後、教えと政治を太陽、月のように昇らせて、学ある者を喜びに編纂し、衆生を楽しみに居らせて、大国の(gürü ulus-yin)大元国(Dai Yuvan ulus)と名付けた。八白室を数通り建設して、大都に都を置いた。35年経って、吉祥の80歳の時、甲午(1294)年に大元(至元)31年になる年に大都でお亡くなりになった。(Пучковский, 1960, facsimile, pp.15-16、Čoyiji, 1981, pp.64-66)

フビライの事績についてはこれ以外何も記していない。これ以前に編纂された年代記にはチベット仏教との関わりが多かれ少なかれ記されていたが、それに関する記述は全くない。注目すべきなのはこれ以前に編纂された年代記には記されなかった、フビライが国号を「大元国」と名付けたという記述が見られることである。更に中国やチベット以外の周辺の多くの国を支配したことも他の年代記には記されていない。フビライ以後の元朝のハーン(皇帝)について、その事績はほとんど記していないが、その諡号については漢語のものとモンゴル語のものとを両方示している。利用した史料に Dai Yuvan ulus-un γoul sudur(Пучковский, там же, facsimile, p.7)を挙げているが、これは『元史』であることは間違いない[24]。恐らくゴムボジャブはモンゴル語訳されたものではなく、漢文の原本を見たのであろう。先の章で紹介したダヤン・ハーンについて記している箇所でも、Dayun qaγan にこれが「Dai Yuvan」、すなわち「大元」であるという注釈を付している(Пучковский, там же, facsimile, p.28)。なお興味あるのはゴムボジャブはそれ以前に編纂されたモンゴル語史料をあまり信頼していないことである(Пучковский, там же, facsimile, p.23、森川哲雄、2007b、p.355)。

次いで『蒙古世系譜』の「大元」に関する記述についてみてみたい。先に紹介したように『蒙古世系譜』が最初ど

の言語で書かれたのかは問題であるが，現在残されている漢文のテキストによると，フビライの事績は極めて簡単ではあるが，それ以前に編纂された年代記よりは詳しく記されている．例えばモンケの命により漢地を支配したことや南宋遠征のこと，またモンケの死後弟のアリク・ブハとハーンの位を争ったことなどを記している．さらに，

（中統）五年，至元に改元し，八年国号を建てて「大元」と曰う．十三年宋を平らげ，尽く中国を勇士，天下大いに治まる．在位三十五年，甲午正月二十二日を以て大都に崩ず．寿八十．諡は聖徳神功文武皇帝，廟号は世祖．陵は起輦谷に在り．（中略）呼必頼汗以前，建元する者無し．故に特に之を書す．国号の大元は『易経』の乾元の義を取る．（賈敬顔，朱風，1985，p.216）

と記している．モンゴル文テキストもほぼ同様の記述である（Heissig, Bawden, 1957，pp.25-26）．「大元」の号を『易経』の「乾元」から取ったことは『元史』巻7，世祖本紀4，至元8年11月辛酉朔の条に見られるものであり，この『蒙古世系譜』の記述は『元史』に依拠したことは疑いない．また『ガンガイン・ウルスハル』よりもずっと『元史』の記述に忠実である．

『アルタン・クルドゥン・ミンガン・ケゲストゥ・ビチク』の著者シレゲトゥ・グーシ・ダルマは「大元国」の名はフビライが付けたとしながらも（Heissig, 1958，III,5 v），以下に紹介するように大元国の時代を拡大している．

チンギスより座位を継承したジョチ，サガタイ（チャガタイ）とオゲデイとトライ（トルイ）より順帝ハーンに至るまで大元国の16人のハーンと昭宗皇帝ビリクトゥ・ハーンよりリンダン・ホトクト・ハーンに至るまで北にある唯一の元国を支配した20人のハーンが政治と教えをどのように完成したか，第3巻に含んだ（記した）．

（Heissig, ibid.,II, 1r）

シレゲトゥ・グーシ・ダルマは「大元」をチンギス・ハーンの治世から始まり順帝まで，さらにその後昭宗ビリクトゥ・ハーンからリンダン・ハーンまでを「元国 Yuvan ulus」とみている．またここでも『元史』が利用されている．フビライについて次のように記されている．

世祖フビライ・セチェン・ハーンにはチャムブイ・ハトンから生まれたドルジ，マンガラ，チンキム，ノモハンの4子がある．［中国書に〔ドルジ，〕皇太子ジンキン，安西王マンガラ，北安王ノモハン，雲南王コンゴルチル，アヤジ・タイジ，西平王アグルクチ，寧王グンジュ，鎮南王トガン，フラト・テムル・タイジの10子があるという．］まさにその『大元・ウルスの書（『元史』）』に，皇太子ジンキン（真金）が先にお亡くなりになって，嫡孫のテムルが31歳の甲寅（正しくは乙未）年にハン位に即いたと言った後，（以下略）

（Heissig, ibid, III, 6v-7r）

多くのモンゴル年代記においてはフビライの子は4人いたと記されているが，『アルタン・クルドゥン』は最初にその4人の名を記したあとで，注釈（カギ括弧の部分）をつけ，「中国書」では10子いたと記されていることを紹介しているが，これは『元史』巻107，表2，元宗室世系表に依ったものである．このように『ガンガイン・ウルスハル』，『蒙古世系譜』，更には『アルタン・クルドゥン』においては元の皇帝（ハーン）の事績については『元史』を利用し，さらにフビライによる「大元国」の命名，あるいは「大元」がいつまで続いたのかについても記されている．しかも編纂年代が後になるにつれて『元史』の利用がより多くなっている．このことは明らかに17世紀に編纂された年代記とは異なっている．

これらの事情はモンゴル知識人が漢語に対する理解を次第に進める中で，彼らの祖先である偉大なフビライ・ハーンが建てた「元朝（大元国）」を『元史』を通して再認識したことを意味している．それと共にダヤン・ハーンの「ダヤン」の意味について，17世紀の年代記編者が本来の意味を十分理解していなかったのに対して，それが「大元」を意味することを明確に理解したのである．前節で紹介したモンゴル語訳された『カンジュル（甘珠爾）』の幾つかの経典の奥書の中でリグダン・ハーンの称号の一部である dayiming が康熙帝時代に校訂され木版印刷された際に，敢えて dayi yuvang に変えられたのもモンゴル知識人の中に「大元」の存在が『元史』などの漢文文献を通じてあらためて知られたためであろう．

1774-75年頃にラシプンスク Rasipunsuγ によって編纂された年代記の表題は『大元国のボロル・エリケ（水晶の数珠）』であり，その表題に『大元国 Dayiyuvan』が付けられている．従来の年代記は元朝のハーンやその事績について触れてはいるものの，元朝の歴史を記したものはほとんど無い．これに対して，『ボロル・エリケ』はその記述の90%が『元史』や『資治通鑑綱目続編』などを利用して年代を追って元の歴史を記しており，この点が従来の年代記と異なっている．またごく簡単ながら匈奴の起源，漢と匈奴との関係などを記していることも他の年代記には見られないものである．なお『アルタン・クルドゥン』と同様にチンギス・ハーンからリグダン・ハーンまでを「大元国」とみなしているが，そのうちチンギス・ハーンから順帝までを前元国 Uridu Yuvan ulus，昭宗アーユルシュリダラ（ビリクトゥ・ハーン）からリグダン・ハーンまでを後元国 Qoyitu Yuvan ulus としている（Mostaert, 1959，III，pp. 173-174）．このように18世紀後半になると『元史』の全体を利用した本格的な元朝史の記述を行なう著作も現われた．

以上のように，18世紀前半に編纂された年代記においては「大元」に関する記述が明確に見られ，特にフビライがその国号を定めたことを記述している．これらの記述は17世紀に編纂された年代記には見られないものである．ただし18世紀前半の年代記では元朝のハーンの事績や元の歴史についてあまり記されておらず，この点は17世紀に編纂されたものと変わりはない．しかし18世紀後半に記された『ボロル・エリケ』においては多くの漢語史料が利用され，「大元」の歴史がかなり詳しく記されている．これらのことは清朝のモンゴル支配が浸透する中でモンゴル知識人が漢語の知識を獲得し，漢語史料を読解出来るようになったためである．すなわち「大元」の存在が漢語史料を通してモンゴル知識人に再認識されるようになったと言えるのである．

## 6、終わりに

本論文では「大元」に対する認識がモンゴル人の中にどのように伝えられてきたのかについて論じた．「大元国 Dai Yuvan ulus」はフビライの治世下の1271年にモンゴルの名に代わるものとして付けられた王朝名であったが，1368年に明の朱元璋により中国領から撤退した後もその王朝名はモンゴリアで継続して用いられた．その王朝も王朝名も最終的に1634年の清朝（後金国）の内モンゴル支配とリグダン・ハーンの死によって名実ともに消滅したとされる．ただしフビライの後裔がその後もずっとモンゴリアを支配し続けたわけではない．順帝トゴン・テムルの孫（子という説もあり）のウスハル・ハーンの死後（1388年），フビライの後裔を確実に辿ることは困難であり，またこの頃フビライの弟のアリク・ブハの後裔がハーンになったことはすでに定説となっている．明朝は初期の段階で「元裔」は絶たれたと認識しながらも，後半期においてもモンゴルの支配者を時に「元裔」という表現をしている．但し明は当時のモンゴリアに「元朝」が継続していることを決して認めなかった．これは明が天命により「元」に代わって天下を支配したという認識を持っていたからである．従って明はモンゴリアを一貫して達達（韃靼）と呼び「元」という呼び方はしなかった．

他方エセンやダヤン・ハーンが明に対して「大元大可汗」の呼称で書簡を送ったことからも明らかなように，モンゴリアでは「大元」が継続しているという認識を持っていた．これは「伝国璽」からも確認されることで，元朝の正統な継承者として当時のモンゴル政権の有力者が「伝国璽」を所有していることをしばしば明に伝えている．それが真印であったかどうかは別問題である．のちに清朝は極めて出所の怪しい「伝国璽」をチャハルのエジェイ・ホンゴルから入手して「大元」を正式に継承したと自認した．

しかしながら「大元」の認識がモンゴル知識人にその後も継続して伝えられたかというと必ずしもそうではなかった．『アルタン・ハーン伝』に一箇所「大元国」の記述が出てくるが，基本的にモンゴルの国名はあくまで「モンゴル」，「モンゴル国」，「大モンゴル国」である．17世紀に編纂された年代記にはフビライが国号を「大元」と定めたことを記す年代は一つもない．ダヤン・ハーンのダヤン Dayan の意味については議論があったが，本来の意味が「大元」であることは間違いない．ただし年代記の編者が皆そのように理解していたというわけではない．とりわけ『蒙古源流』の著者サガン・セチェン自身がそのように理解していたかどうかは疑問である．『蒙古源流』の記述を多く利用した『シャラ・トージ』の編者は当該部分に関して，dayan を「全体の」というように理解したが，これは強ち誤解とは言えないのである．17世紀初めに分裂したモンゴルを統一しようとして活動したリグダン・ハーンは，自らの称号にチンギスという名やフビライの称号の一つである転輪王の名をつけ，さらにその権威を高めるために「大明」を意味する Dayiming の称号をも唱えたが，「大元 Dai yuvan」の称号は付けなかった．このことは17世紀においてモンゴル知識人の間に「大元」の記憶がかなり稀薄になっていたとを意味するのである．

これに対して18世紀になると状況は大きく変わる．モンゴル知識人の間に漢語の理解が進み，年代記編者は『元史』を利用するようになり，それと共にフビライと「大元」との関係を再認識することになった．彼らはモンゴル国に代わる「大元国」の名はフビライが付けたこと，またダヤン・ハーンのダヤン Dayan は「大元」であることをそれによって改めて確認したのである．知識人の間に「大元 Dai Yuvan」の存在が再認識される中で，康熙帝の後半期，18世紀前半に行われた『カンジュル（甘珠爾）』の校訂においてもその影響が見られた．すなわちリグダン・ハーンの長々とした称号の中に dayiming（大明）の号が含まれていたが，一部の校訂者はこれを Dai yuvan に変えている．おそらく「元裔」であるリグダン・ハーンの称号としては相応しくないと考えたからであろう．

17世紀にモンゴリアは清朝の支配下に入ったが，その支配が浸透していく中でモンゴル知識人の中に起きたナショナリズム的な感情はモンゴルの歴史，すなわちモンゴル年代記の編纂へと駆りたてた．彼らはチンギス・ハーンとともにフビライ・ハーンに対してもチベット仏教の導入者，保護者として高い評価を与えたが，彼自身が創建した「大元国」についての情報をほとんど持っていなかった．彼らはフビライをあくまでチンギス・ハーンの建国した「大モンゴル国」の継承者の一人としてしか見ていなかった．しかしながら18世紀になるとあらためてモンゴルの歴史に関

心を持つ者が多く現れる中で、モンゴル知識人はあらたな年代記を編纂した。彼らは前代の編者とは異なり『元史』など漢語史料を読む能力を持ったようで、それと共にフビライの事績を確認することになった。18世紀に編纂された年代記において「大元国」に関する記述が一般的になったのはそのためである。

### 注

1、『蒙古源流』ではビリクトゥ・ハーンとウスハル・ハーンは兄弟であると記している(Urga.50r)。これに対して『明史』巻327、韃靼伝では愛猷識理達臘(ビリクトゥ・ハーン)と脱古思帖木児(ウスハル・ハーン)を父子の関係にあるとしている。

2、この問題については Honda (1958)、岡田英弘(1966)、薄音湖(1987)、宝音徳力根(2000 )など多くの研究がある。フビライの後裔がその後も続いたかどうかについては見解が異なっている。

3、このことについては森川哲雄(2007a)でごく簡単に触れている。

4、『高麗史』巻41、恭愍王己酉(1369)年、8月丙戌他。なお「北元」の呼称は近年、明時代のモンゴル政権全体を指すものとして用いられることが多い。

5、『元史』巻127、伯顔伝に、「至元13(1276)年正月甲申、皐亭山を次す。宋主、知臨安府賈余慶を遣わし、宗室の保康軍承宣使尹甫、和州防禦史吉甫と同に、伝国璽及降表を奉じて軍前に詣る。伯顔受け訖り、囊加歹を遣わし、余慶等を以て臨安に還し、宋の宰臣を召し出し降事を議す。」と記されている。この伝国璽はその後失われたらしいが、フビライの亡くなった至元31(1294)年にムハリ(木華黎)の曾孫、碩徳の家で再発見された。そこには「受天之命、既寿永昌」と記されていたという(『元史』巻164、楊桓伝、至元31年)。

6、ロ氏『アルタン・トプチ』ではより長い話になっている。

チンギス・ハーンが生まれて7日経ったのち、海の砂州の中に黒っぽい鳥が大きな黒い石の上に、太陽が巡るときに回って3日鳴いた。イスゲイ・バートルは、これは一羽の吉兆を持つ鳥となった、と言って、その黒い石を割ってみると金印が現われて天に飛んで行った。まさにその石は元通りになって、その鳥がまた元のように鳴いた。また割ると銀の印璽が現われ海に入った。またその石が〔元通りに〕なって、その鳥がまた無くと、イスゲイが言うには、この子が生まれたのち、この黒っぽい鳥は吉兆を持つ者である、と言って、またその石を割って見れば中に玉璽があった。取ってきて清浄にし尊重して香、灯明をともして暮らすうちに、その黒っぽい鳥は〔ゲルの〕煙出し穴の覆いの上に座ってチンギス、チンギスと鳴いた。その鳥の鳴いた〔声の〕事情によりチンギス・ハーンと名付けたのはそのようであった。(Вира , 1990, 12b-13a)

7、ダヤン・ハーンの事績については『蒙古源流』に比較的詳しく記されている。それによれば彼は、名前がバト・モンケ Batu möngke、甲申(1464)年生まれ、7歳の庚寅(1470)年、7歳で即位し、癸卯(1543)年、在位74年、80歳で死去したという。しかしながら『蒙古源流』の記す年代は明側の同時代史料と一致しない点が多く、またその事情についてその他のモンゴル語史料とも一致しないことが多く、その年代や事績については、様々な意見が出されている。それらの詳細については省くが、現在では、『アルタン・ハーン伝』に基づいて、1480年、7歳即位、38年在位、44歳の1517年に亡くなった、という説が有力視されている。

8、『アルタン・ハーン伝』に記されているダヤン・ハーンの紀年は、7歳で即位したこと、丁丑(1517)年に44歳で亡くなった、ということだけである(珠栄嘎、1991、pp.193, 199)。『アルタン・トプチ』にも38年在位したことが記されており、これらのことから注7に示した年代が推定できる。

9、ダヤン・ハーンの本名についてはモンゴル語史料は一貫してバト・モンケであるが、明側の史料では「伯顔猛可(バヤン・モンケ)」と記される。他方、モンゴル語史料ではバヤン・モンケとバト・モンケは父子の関係になっているのに対し、明側の史料では巴図猛可(バト・モンケ)と伯顔猛可が兄と弟の関係になっていることも問題を複雑にさせている。

10、ここで『蒙古源流』に記される Dayan ulus を「大元国」と訳しているのは、Dayan が本来「大元」を意味しているという説に基づいている。

11、『蒙古源流』の奥書に、利用した史料として Erten-ü Mongγol-un qad-un ündüsün-ü yeke sir-a tuγuji の名を示しているが(Urga.97r)、これが現存する『シャラ・トージ』の一つの写本の表題と一致すること、また内容的に一致することが多いことから、この『シャラ・トージ』が『蒙古源流』の編纂に利用されたという見解が出されている。しかし実際には逆で、編纂年代から見て『シャラ・トージ』が『蒙古源流』を利用したのである。これについては森川哲雄(2002)参照。

12、その経緯については森川哲雄(2007b、pp.202-203)を参照のこと。

13、『シャラ・トージ』には何種類かの写本があるが、1891年、ロシアのチュルク学者ラドロフのモンゴル調査時

に得られた古い写本は最初の数ページが欠けていて書名が記されていなかった。そのため、初めこの年代記は『ラドロフの歴史』として知られるようになったが（Владимирцов, 1934, стр .16)、その後同じ内容を持つ年代記の写本に『シャラ・トージ』のタイトルが付けられていたので、以後は一般に『シャラ・トージ』と呼ばれるようになった。

14、なお張穆はその著『蒙古遊牧記』（巻７）において、

巴延蒙克、巴図蒙克を生む。成化六年、年七歳にして嗣ぐ。達延汗と号す。明人訳して大元大可汗と為す。大元は達延の譌(あやまり)なり。

と記している。恐らく漢訳の『蒙古源流』や明史料を参照してのことであろうが、「大元は達延の譌なり」というのは「達延」の意味を全く理解していなかったことを示している。

15、『アルタン・クルドゥン』（Heissig, 1958, facsimile, III-24r）もボヤン・セチェン・ダユン・ハーンと記しているが、これは『アルタン・クルドゥン』が『アサラクチ史』を利用しているためである。

16、この他、アルタン・ハーンの王国を「金国 Altan ulus」と記している記録がある。それは内蒙古自治区、包頭市、土黙特左旗、美岱召鎮にある、美岱召の泰和門の扁額に記された題記である。そこには泰和門の建設年について「大明金国丙午年戊戌月己巳日庚午時建」と記されている。丙午年は1606年のことである。問題なのは「大明金国」という名称で、モンゴル語に直すとDayiming altan ulus となる。Dayiming（大明）の意味については多くの見解が出されており（李逸友、1981、李漪雲、1982、王徳恭、1983、薄音湖、1991、1994、2004、喬吉、2003)、またこれについては次章で触れるが、もう一つ問題なのは「金国 Altan ulus」という名称である。その意味は「アルタン・ハーンの支配した(築いた)王国」ということになる。李漪雲(1982)はこれを根拠にアルタンの王国を「金国」と呼んでいるが、他の如何なる史料にもその王国を「金国、Altan ulus」と記したものはない（Serruys、1958b, p.104, note 24)。従ってこれがアルタンの王国の名であったと言うことは困難である。

17、『アルタン・ハーン伝』の編纂年代についてはいろいろ議論があるが、この点については森川哲雄、1987、pp. 5-8参照。

18、『蒙古源流』、Urga.68v. 主に漢文史料に依拠してはいるが、萩原淳平 (1980) の第五章「リクダン・カーンの生涯とその時代」(pp.295-400) はリグダン・ハーンに関する詳細な研究である。

19、『蒙古源流』は順帝が明に追われて大都を放棄したことについて次のように記している。

それから一人一人列をなして戦い合い、逃れ出たのは四十万戸モンゴル Döčin tümen Mongγol のうち、六万戸が出て三十四万戸は遮られて残った。そこで前後脱出したその六万戸を集めて、ケルレン河の岸にいたってバルス城というものを建設して暮らすうちに、その53歳の庚戌（1370）年に亡くなった。(Urga.50r)

ここに記されている「四十万戸モンゴル Döčin tümen Mongγol」は明らかにモンゴル帝国、元朝全体を意味したもので、逃れた「六万戸」というのはダヤン・ハーン時代に成立した政治体制を意味している。著者不明『アルタン・トプチ』ではこの順帝がモンゴルに逃れたことについて、

〔ジュゲ〕は〔大都の〕門番たちに多くの宝物、財物を与えて入って、兵士等を明らかに出して、ハーンの黄金の宮殿を包囲しよう、というのをハーンは知って、三十万戸モンゴル Γučin tümen Mongγol を放棄して、その十万戸モンゴルを連れて脱出した。(北京版Ⅰ、p.55)

と記しているが、三十万戸と十万戸を足すと四十万戸になる。順帝が引き連れた「十万戸」はやはりダヤン・ハーン治下の六万戸とオイラト四万戸を合計したものである。ただしこの場合でも「四十万戸」の意味するところは『蒙古源流』と同じである。しかし「Döčin tümen 四十万戸」が明代以前のモンゴル帝国、元朝のみを指しているかというと必ずしもそうではない。『蒙古源流』自体、「四十と四」という表現でいわゆる明代のモンゴルとオイラトを呼んでいるし、『アルタン・ハーン伝』ではダヤン・ハーン時代のモンゴルも、アルタン・ハーン時代のモンゴルも「四十万戸モンゴル」と呼んでいる(珠栄嘎、1991、pp.193, 227, 265, 288, 311, 318)。ただリグダン・ハーンはチンギスの名と共に「四十万戸モンゴルの主」と称していることから見るとこの「四十万戸」はやはり世界帝国としてのモンゴルを指していると思われる。

20、カスヤネンコ Касъяненко とリゲティ Ligeti の転写方法は一部異なっているが、ここではそれらを調整せずに大体両者の転写によって記した。

21、この内蒙古、バーリンの白塔子の白塔にあった碑文はポズドネーフが訪れた1895年にはそこに存在していたが、その後破壊され、1920年にベルギーの一神父（モステールト神父か）が訪れたときには石碑の白大理石から切り割った一基の石臼があり、ハイシッヒが訪れた1941年にはその片割れさえも見つからなかったという（ハイシッヒ（田中克彦訳)、1967、pp.153-154)。

22、満洲語に翻訳された『元史』は1640年からトゥデンTüdeng、オルジェイトゥÖljeitü、セレンSereng、ソノムSonomらによってモンゴル語への翻訳が行なわれ、1644年に完成している（Nasun,1987,p.1）。

23、これは現在残されているモンゴル文写本に、著者ロミの記した序文に、「満洲字、漢字で記した」と記されていること、またモンゴル語写本の最後に、道光19(1839)年に「翻訳された」と記されていること（Heissig, Bawden,1957,モンゴル文テキスト、Ⅰ-4r, Ⅱ-20）から、『蒙古世系譜』は当初、満洲文と漢文で記され、後にモンゴル語に翻訳された、というのが通説になっていた。しかし内蒙古図書館所蔵の漢文版テキストには「訳するに清、漢文字を以てし」と記されており（賈敬顔、朱風、1985, p.207)、これによれば当初モンゴル文で記されていたが、後に満洲語訳、漢訳されたことになる。これらの議論については森川哲雄(2007b、pp. 371-373）参照。

24、プチュコフスキーはこれに疑問符を付けながらも「『元史』かもしれない」としている（Пучковский , 1960, стр p.20)。『ガンガイン・ウルスハル』はモンゴルの王統の始祖を、他の年代記のように伝説的な蒼き狼と生白き牝鹿ではなく、『元史』と同様に、ボドンチャルとしていることから、これが『元史』を指していることは明らかである。

**参照文献**


『元朝秘史』（四部叢刊三編史部）商務印書館、1936（台湾商務印書館復印、1966）

『元史』、北京、中華書局、1976。

『明史』、北京、中華書局、1974。

田村実造編、『明代満蒙史料—明実録抄蒙古篇』京都、京都大学文学部、1954-1959。

『大清歴朝実録』台北、華聯出版社、1964。

国書刊行会、1908：『高麗史』第一冊、東京、国書刊行会。

沈曽植撰、張爾田校補、1934：『蒙古源流箋証』（『中国辺疆叢書』第一輯）、台北、文海出版社

岡田英弘、1966：「ダヤン・ハガンの先世」『史学雑誌』75-8、pp.1-38.

岡田英弘、1996：Umaratu ün-ü törö-yin töb ulamjilal—Dai ün-ü ulus-un čola kiged törö ulamjilaqu tamaγ-a. *Elbeg bütügel—Professor doktor Jayčid sečen-ü nayan nasun-u oi-du.* Öbörmonγol-un soyul-un keblel-ün qoriy-a. Qayilar, pp.74-88.

金岡秀郎、1987：「清代モンゴル翻訳文献概史－『メルゲッド・ガルヒン・オロン』成立の背景」『大倉山論集』第21輯、pp.195-230.

ゲレルトゥ、ソーハン、1997：「チンギス・ハーンのqasbuu tamaγ-aに関する伝承について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第43輯、第4分冊、pp. 17-27.

江　実、1940：『蒙古源流』京都、弘文堂。

ハイシッヒ、W.(田中克彦訳)、1967：『モンゴルの歴史と文化』東京、岩波書店。

薄音湖、1991：「明代蒙古の若干の称号について」『日本モンゴル学会紀要』22、pp.71-78.

萩原淳平、1980：『明代蒙古史研究』、京都、同朋舎。

森川哲雄、1987：『アルタン・ハーン伝の研究』、福岡。

森川哲雄、2002：「17世紀から18世紀初頭のモンゴル年代記について」『東洋史研究』61-1、pp.1-33.

森川哲雄、2007a：「モンゴル人の中国（中華）に対する意識の変遷(明～清)」『九州大学21世紀COEプログラム、「東アジア世界と日本：交流と変容」統括ワークショップ報告書』 pp.183-193.

森川哲雄、2007b：『モンゴル年代記』東京、白帝社。

烏蘭、1990：「Dayan与“大元”—関于達延汗的汗号」『内蒙古大学学報（哲社版)』1990-1、pp.10-14.

烏蘭、2000：『《蒙古源流》研究』、遼寧民族出版社。

王徳恭、1983：「美岱召泰和門石刻題記証誤」『包頭文物資料』第一輯、pp.185-186.

賈敬顔、朱風(訳)、1985：『漢訳蒙古黄金史綱』呼和浩特、内蒙古人民出版社。

喬吉、2003：『内蒙古寺廟』内蒙古人民出版社。

胡鐘達、1984：「明与北元—蒙古関係之探討」『内蒙古社会科学』1984-5、pp.44-55.

蔡美彪、1992：「明代蒙古与大元国号」『南開学報(哲社版)』1992-1、pp.43-51.

珠栄嘎、1991：『阿勒坦汗伝』内蒙古人民出版社。

清史編委会、2001：『清代人物伝稿』上編、第十巻、北京、中華書局。

曹永年、1990：「“伝国璽”与明蒙関係」『内蒙古社会科学(文史哲版)』1990-2,pp.60-64.

宝音徳力根、2000：「15世紀中葉前的北元可汗世系及政局」『蒙古史研究』第六輯、pp.131-155.

薄音湖、1987：「関于北元汗系」『内蒙古大学学報—哲社版』1987-3、pp.41-51.

薄音湖、1994：「北元与明代蒙古」『内蒙古大学学報—哲社版』1994-1、pp.9-12.

薄音湖、1998：『明代蒙古史論』台北、蒙蔵委員会。

薄音湖、2005：「明美岱召泰和門石刻考」『民族研究』2005-5、pp.87-92.

包文漢、喬吉、1994：『蒙文歴史文献概述』、呼和浩特、内

蒙古人民出版社。

李逸友、1981：「土默川上的第一座明代城寺—美岱召」『内蒙古文物考古』創刊号、pp.145-150.

李漪雲、1982：「大明金国考」『内蒙古社会科学』1982-6、pp.97-101.

Anonymous, 1925： *Činggis qaγan-u čadig.* Begejing, 蒙文書社、(著者不明『アルタン・トプチ』、北京版Ⅰ)

Čoyiji, 1981：*Γangγ-a-yin urusqal.* Kökeqota, Öbör Mongγol-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

Haenisch, E.,1955：*Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Sechen Sagang (alias Sanang secen).* Berlin, Akademi Verlag. (Urga.と略称)

Heissig, W., 1958：*Altan Kürdün Mingγan Gegesütü Bičig. Eine mongolische Chronik von Siregetü Guosi Dharma (1739).* Kopenhagen, Ejnar Munksgaard.

Heissig, W., 1959：*Die Familien-und Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen I.* Wiesbaden,Otto Harrassowitz.

Heissig, W., 1966：*Die mongolische Steinschrift und Manuskriptfragmente aus Olon süme in der Inneren Mongolei.* Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht.

Heissig, W.,Bawden, C.R., 1957：*Mongol Borjigid Oboγ-un Teüke von Lomi (1932)*。Wiesbaden, Otto Harrassowitz.

Honda, M., 1958：On the Genealogy of the Early Northen Yuan. *Ural-Altaische Jahrbucher*, 30-3・4, pp.232-248.

Lessing, F., 1960：*Mongolian-English Dictionary.* Berkley & Los Angeles, University of California Press.

Ligetti, L., 1942：*Catalogue du Mongol Kanjur imprimé.* vol.1., Budapest, Sociéte Körösi Csoma.

Mostaert, A., 1959：*Bolor Erike. Mongolian Chronicle. 5* vols. Cambridge, Harvard Univ. Press.

Nasun (ed.), 1987：*Dai yuvan ulus-un bičig.* Qayilar, Öbör Mongγol-un soyur-un keblel-ün qoriy-a.

Schmidt, I.J., 1829：*Geschichte der Ost-Mongolen und ires Furstenhauses, verfasst von Ssanang Ssetsen Chungtaidschi der Ordus.* Leipzig.

Serruys, H., 1958a：*Genealogical Tables of the Descendants of Dayan-qan.* S-Gravenhage, Mouton & Co.

Serruys, H., 1958b："Notes on a Chinese Inscription of 1606 in a Lamaist Temple in Mai-ta-chao, Suiyuan." *Journal of the American Oriental Society,* vol.78-2, pp.101-113.

Бира, Ш., 1978：*Монгольская историография XIII-XVII вв.* Москва.

Бира, Ш. (ed.), 1990：*Altan tobči.* Ulaγanbaγatur. (ロ氏『アルタン・トプチ』)

Владимирцов,Б.Я., 1924：О прозвище 《Dayan》 qaγan ( Даян-хан ). *ДАН-В* .119-121. (再録、Владимирцов,Б.Я., 2002：*Работы по истории и этногрфии монголбских народов.* Москва, стр .218-220)

Владимирцов,Б.Я., 1934：*Общественный строй монголов, монгольской кочевой феодализм.* Ленинград

Касъяненко, З. К., 1993：*Каталог петербургского рукописного 《Ганжура》*. Москва

Позднеев, А. М., 1886：*Монголия и монголы.* 2 том, С.-Петербург

Пучковский, Л. С., 1960：*Гомбожаб, Ганга-йин урусхал. (История золотого рода владыки чингиса-сочинение под названием течение Ганга).* Москва

Шагдарсүрэн, Ц., И сөн-го, 2002：*Byamba-yin Asaraγči neretü (-yin) teüke.* Улаанбаатар.

Шастина, Н. П.1957：*Шара туджи, монгольсая летопись XVII века.* Москва-Ленинград.